

# 繰り返しを中心とした読書方法

## Iterating reading method

田 中 裕

キーワード：質問、考える力、教育実践、読書百遍、多読、読む速度

### 要 約

本研究は文章を何度も読む事の有効性を確かめる教育実践である。デカルトの方法序説を30回読ませた場合についての研究<sup>[1]</sup>とは対照的に、比較的短い3000-4000字の文書を3度読み、「読む速度」と「理解」について調べた。速度では大きな改善は見られなかったが、理解では有効であった。また理解と読む速度との間には強い相関はなかった。

## 1. イントロダクション

「読書百遍義（ぎ）自（おのずか）ら見（あらわ）る」という言葉がある。これは「どんなに難しい書でも何度もくりかえして読めば、意味が自然に明らかになる」との意味である。著者は山手短大生活学科で文章を何度も読めば理解はどうなるかについて定量的に調べている<sup>[1]</sup>。1年生のゼミでデカルトの「方法序説」を30回読み、理解の程度を1回ごとに記録した。それによると、読む回数が増えるほど理解力の平均値は増した。30回まで上がり続けている。なかには15回ぐらいまで全く理解ができなかったが、15回を過ぎてから急に理解が進んだ例もあった。30回でも上がり続けるが、最初の4、5回でもかなりの向上が見られた。

今回の報告は比較的短い文章（3000-4000字）を3度読むことを繰り返した場合、読書の速度、理解がどうなるかを調べたものである。毎週の授業で12の文章に対して試みている。

読み方で大切な点は、1行程度を何度も繰り返して読むのではなく、分からなくとも一章ぐらゐを繰り返して読むことである。具体的には次のように行った。

### 1. 1 授業方法

授業「見えない世界」で文章を読み質問をする訓練を行った。その中で3000-4000字程度の文章を何度も読んでもらった。授業の1回の流れを要約すると次のようになる。

1. 前回の授業に関する質問集（学生の質問とそれに対する教員の答え約2000字）を読み、

さらに100字以上の質問を考える。

2. その日の資料を能動的に読むために、読む前に教員が用意した設問を与える。これは10問程度の設問で、これにより、その日の授業は何を学ぶものかを知り、それに関する設問を頭に入れる。講義を能動的に受ける準備になる。設問は資料又は教員が講義の中で話す中に回答が含まれているものと、考えなければならないもの、あるいは意見を求めるものなどある。単に選択するような設問は出題しない。少しでも考える力をつける訓練をしたいからである。ただし簡単に答えることができる設問も入れている。学生に自信を付けさせるためにはすぐに答えることができる設問も重要である。
  3. 3度資料を読む。1回毎に読みにかかった時間、理解の程度（5段階）を記録する。資料は学生向けに教員が書き下ろしたものである。この読みの部分が授業で最も重要な点である。簡単な文章ではないので集中せよと言うだけでは集中できない。そこで時間を測定することを行った。学生には読み終わったら挙手するように指示しておく。挙手したら時間を言って記録させた。1クラス40人程度なのでこのような方法が可能になる。時間を測定したが、これは速く読むことが目的で無いことは何度も学生に言っている。あくまでも集中が目的である。また時間だけでなく理解度を5段階（1まったく理解できずから、5よく理解できたまで）で記録した。ただし学生によっては3.5のような記述をしている場合もあり、その数値はそのまま採用している。
- 読み方のポイントは、「読書百遍」<sup>[1]</sup>で明らかになったように、分からない小さな範囲を何度も読むのではなく、資料全体を一度に読み、それを繰り返すように指導している。また分からない言葉は最初から意味を調べることはせず、読み流し文章全体から推定するように教えている。仮に意味を調べる場合も3度くらい読んでから調べるように指導した。学生が文章を理解できないのは、言葉の意味のこともあるが、文章全体の流れや論理性が理解できていないことが多いので、辞書を調べても分かった気にならないことが多い。最初は分からない部分に印を付けるだけでよいと指導している。なお与えた資料には、難しい漢字の読みと、意味の説明を一覧にして載せている。
4. 教員が同じ資料を朗読しながら説明する。
  5. 最初に与えられた設問に答える。
  6. 答えが資料に無い100字以上の質問を考える。

最後に「その日の講義内容と関係するが資料や教員の説明には答えが無い100字以上の質問を考えること」をする。これがこの授業最大の難問でかつ授業のポイントである。学生がもっとも頭を悩ます部分でもある。これにより資料で得た新たな知識と、これまで自分の中で持っていた知識とを関連づけることを強制的にする。難問だが、自分の知識を関連づけ、物事を多面的に見る第一歩と考えている。この質問を作るためにも、学生は文章を一生懸命読む必要がある。

## 1. 2 授業 見えない世界

上記のような授業の結果がどうであったかを述べる前に「見えない世界」という講義について簡単な説明をする。この授業は授業名から推定されるような怪しげな内容（超常現象等）の講義ではない。学生と話していると物事の表面だけを見て判断することが多いと感じることが多かったので、「物事の裏や原因、あるいはいろいろな理由で見えない部分を考える」きっかけになる授業を目指して2002年より始めたものである。大切な授業と判断し最初から1年生前期の必修科目として設置している。2010年度を受講生は111名で3クラスに分けて講義を行った。多面的に考える力をつけることがこの授業の大きな目標である。2010年度では、次の3点を目的として、この目標の実現を図った。

1. 何度も読めば難しい文章も理解できることを体験的に知る。
2. 疑問、質問を作る力をつける。
3. 見えない世界を考えることができる。

人間が歴史を通じて作り上げてきた多くのものが言葉で表現されているだけに、文章を読む力は必須のものである。しかしながら学生の文章を読む力は落ちている。学生が文章を読まないのは、読んでも理解できないからである。この授業は愚直な方法だが、「何度も読めば文章の意味は分かる」ことを体験させることが第一の目的である。理解する方法を知るとは、読書離れへの一助になるのではないかと考えている。

第二の目的は疑問・質問を作る力をつけることである。本学園（神戸山手学園）の教育理念の一つに「自学自習」がある、これができるための第一歩は自分で疑問・質問を考えつけることである。この目的にそって質問をつける力を強制的につけることを目指している。このような訓練はこれまであまり経験していないだけに、効果が期待される。

第三の目的はこの科目ができた本来の理由「見えるものの背景にある見えない世界を考えることができる」ことである。そのために学生にとって比較的身近な例をとりあげ、実は見えない部分を知ると、どんなに理解が変わるかということを示す例を学ぶ材料とした。ただし難易度は高い。

2010年度の具体的内容は表1の文章の種類に示されている。表には学生に読ませた文章の字数も載せている。以下は主にこれらの目的のうち、「何度も読む事」の効用に関して定量的にまとめている。それ以外の第2第3の目的に関してはこれまでの報告<sup>[2][3]</sup>でまとめている。

## 2. 読むことに対する集中度

多くの学生は本を読まない。著者の所属する生活学科学生の図書館利用率は一人あたり年間一冊に満たない状態である。したがって授業でも文章を読ませるのは至難の技である。単に読みなさいと言っても、それだけでは集中して読まない。今回は3000字から4000字の文を読ませ

表1 読書の回数と読めた学生の割合

文章の種類	文字数	0回	1回	2回	3回
1 生活学科の教育目標と見えない世界	3489	0.000	0.000	0.049	0.951
2 何故書物を読む必要があるか	2965	0.000	0.032	0.084	0.884
3 「読書百遍義自ら見る」は正しいか	2339	0.022	0.033	0.088	0.857
4 質問、疑問の大切さ	3692	0.087	0.065	0.022	0.826
5 社会と個人を理解する	3956	0.076	0.022	0.087	0.815
6 多元知能論	3863	0.077	0.033	0.099	0.791
7 食品添加物	3638	0.033	0.054	0.043	0.870
8 暗くて見えないもの	3112	0.011	0.000	0.068	0.920
9 電磁波によって見え方が異なる文章	3688	0.074	0.012	0.074	0.840
10 隠れて見えないもの	3674	0.011	0.011	0.022	0.957
11 小さくて見えないもの	3445	0.034	0.011	0.069	0.885
12 自然の全体像(累層性)	3262	0.034	0.034	0.045	0.886
平均	3427	0.038	0.026	0.062	0.874

たが、1度読むのに6分強の集中が必要になる。これができないのである。そこで時間を測定することを導入した。「よーい始め」で読み始め、読み終わったら手を上げる。ゲーム感覚で行い、集中度を上げた。しかし、それでも5、6分が続き、机の上につぶす学生がたかさんでくる。1度目は集中して何とか読んでも2、3度目はできない学生も多い。学生には読んでいる最中に「がんばれがんばれ」と声をかけたり、いろいろ激励するが、それでも読めない。

表1は出席者の中で一度は読めた者、2度読めた者、3度最後まで読めた者の割合である。例えば2番目の文章「何故書物を読む必要があるか」の0回で0.000とあるのは読めなかった者がいなかったことを示している。1回の0.032は1回しか読めなかった学生が3.2%であることを示している。読めたか否かは記録をしたか否かで判断した。学生にはどうしても読めない場合は、その回は休んで次の回をしっかりと読みなさいと言ってある。激励しても一度も読めない学生がいる。日本語だと思ふからへんだと思ふがこれが知らない外国語だと思ふと読めないのも納得がいく。初めての文章を声を出して読んでもらうと、3分の2以上の漢字が読めない学生もいるのである。そういう学生にとって一度でも読み切ることは大変難しい。したがって1回も読まずに終わるのが平均で3.8%もいるのである。授業で決められた3回を読んだ学生は平均で87.4%である。週が進むにつれて、この割合が上がってくることを期待するがそう

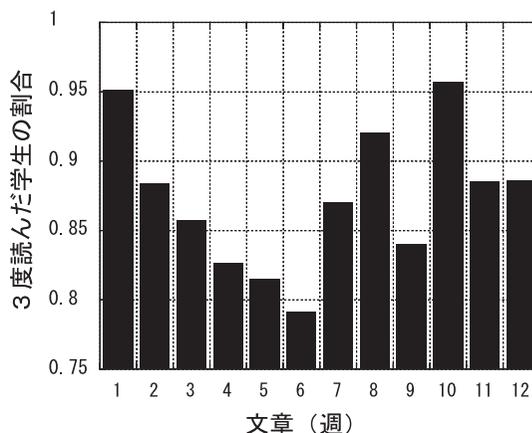


図1 3回読んだ学生の割合

はうまくいかない。図1を見てもらえば分かるが、初回は非常に良く、その後は下がっていく。しかし、後半で再び上がってくる。後半の文章の内容が学生達の苦手な理系的な内容であることを考慮すると、次第に慣れていっているとは言えるかもしれない。

### 3. 読む速度の変化

読む速度はどうであろうか。表2に文章毎の読みの速度（語／秒）を示している。伸びは（3回目の速度－1回目の速度）を示している。1回目で読みの速度は7.9－10.5語／秒、3度読んだ時の速度の変化の平均は1.04語／秒程度で速度に関しては大きな変化はない。個人別の速度分布を図2に示してある。分布は速度の大きいほうに伸びており、正規分布ではない。

表2 読書の回数と速度（語／秒）

文章	1回目		2回目		3回目		伸び率
	速度	標準偏差	速度	標準偏差	速度	標準偏差	
1	9.3	1.7	10.1	1.9	10.3	1.7	1.00
2	9.0	2.1	9.4	1.9	10.1	2.2	1.16
3	8.2	1.7	8.8	1.6	9.3	1.9	1.12
4	10.2	2.2	11.0	2.4	11.5	2.3	1.29
5	10.9	2.2	11.6	2.6	13.6	12.3	2.64
6	10.1	1.9	10.6	2.1	10.6	1.8	0.59
7	10.0	2.1	10.4	1.8	11.0	2.1	1.01
8	9.9	2.2	10.1	1.5	10.2	1.7	0.25
9	10.0	2.0	10.3	1.6	11.1	1.7	1.06
10	9.6	1.7	10.3	2.3	10.3	1.9	0.70
11	9.6	1.6	10.3	1.7	10.6	2.2	1.00
12	9.0	2.1	9.6	1.6	9.6	1.9	0.65
平均	9.6	2.0	10.2	1.9	10.7	2.8	1.04

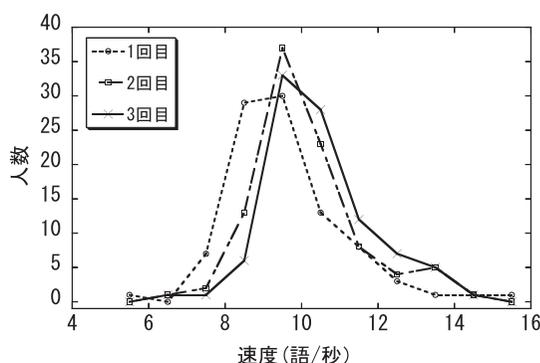


図2 回数毎の読みの速度分布

表3 読書の回数と理解度

文章	1回目		2回目		3回目		伸び率
	理解度	標準偏差	理解度	標準偏差	理解度	標準偏差	
1	2.38	0.91	2.93	0.97	3.36	0.94	0.98
2	2.48	0.93	3.02	0.88	3.43	0.92	0.94
3	2.44	0.97	2.96	0.87	3.34	0.91	0.89
4	2.33	0.79	2.79	0.75	3.16	0.81	0.83
5	2.65	0.87	3.16	0.83	3.52	0.85	0.87
6	2.57	0.92	3.04	0.94	3.49	0.90	0.92
7	2.98	0.90	3.41	0.97	3.62	0.97	0.63
8	2.90	0.81	3.37	0.87	3.65	0.88	0.74
9	2.75	0.90	3.15	1.01	3.32	1.03	0.58
10	2.82	0.82	3.18	0.90	3.42	0.83	0.59
11	2.84	0.95	3.22	1.00	3.53	0.90	0.70
12	2.69	0.93	2.96	0.93	3.29	0.90	0.59
平均	2.65	0.89	3.10	0.91	3.43	0.90	0.77

#### 4. 理解の変化

理解は回数を増やすと確実に増す。平均で1回目の2.65から3回目の3.43まで上がっている。これは読んでいて理解が進んだと実感が伴う数値である。文章による差はあるが伸びにして0.58から0.98まで向上している。どれも学生達にはかなり難しい文章だが、何度も読めば向上するのである。図3に読みの回数毎に、学生の理解の分布が

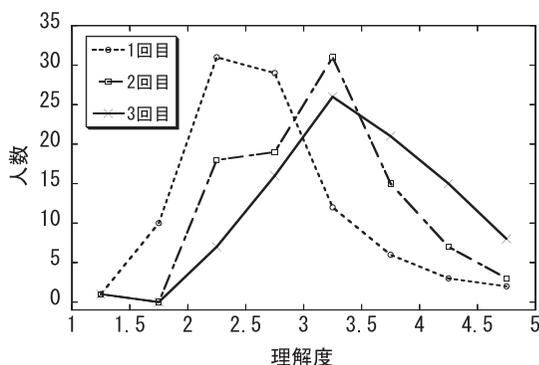


図3 回数毎の読みの理解度分布

どのように進むかを示しておいた。これを見ても確実に理解が進んでいることがわかる。

何度も読めばある程度理解が進むことは文章をよく読む人は経験上知っているが、学生達のかなりは、そのことを知らない。それどころか、何度読んでも解らないと堅く信じている学生も多い<sup>[3]</sup>。例えば「私は、文章を何度読んでも、分からないものは分からないと思っていたし、分からないから読むこと自体あきらめていました。」等の意見をよく聞く。

しかしながら、ここで示したように、何度も読むと確実に理解は深まる。そうすると学生達は「最初は何回も読むだけでは理解なんかできないだろうと思いました。1回読んでも5回読んでも分からない文章は分からないと思ったからです。けど、この授業で何回も同じ文章を読んでいると、最初はよく分かんなくても最後に読んだ時には、なんとなく分かるようになっていたのは確かです。」とか「わからなくとも、理解しようとする気持ちを持って読みなおすことが大切なことだと私は思った。」という意見がでできます。

学生達は本当は理解したがついています。単純だけど実行できる「何度も読む」ことを体験さ

せることはとても重要と考えています。

## 5. 読みの速度と理解

読みの速度と理解はどう関係しているであろうか。今までの結果をみると読みの回数を1から3回まで増やすと少し速度が上がる、一方理解はかなり上がる。表面だけ見ると速度が上がって、理解が進んだように見えるが、速度と理解は原因と結果の関係には無い。速く読める理由にはいろいろある。学生が「読んでも分からないから、目で適当に流して文章を読む」場合も速く読める。読んでも頭に何も浮かばないとその場合も速くなる。逆によく考える学生で読むのがとても遅い学生もいる。集中力が切れると遅くなる。集中力があるために、良く考え時間がかかる場合もある。2回目、3回目になると読む速度が遅くなる学生も多い。

図4、5に個人の12回の文章の平均値の理解と速度を示している。1点で一人の情報を示している。かなりばらばらであることが分かる。ただ原因は分からないが、3回目には、少し相関がでてくるのが見てとれる。実際に相関係数は1、2、3回目で、それぞれ、0.138、0.277、0.336と増えている。

## 6. まとめと今後の課題

今回の読書に関する定量的分析で分かったことは次のことである。

1. 本学生生活学科の学生の読む速度は8 - 12語/秒である。
2. 文章を3度ぐらい読んでも速度は1語/秒程度上がるだけである。
3. 文章を3度読むと理解度はかなり上がり、何度も読むと分かることを体験できる。
4. 理解と速度との間の相関は低い。

今回は理解に関して学生の主観をたよったがもう少し客観的な指標で、同様の調査をおこな

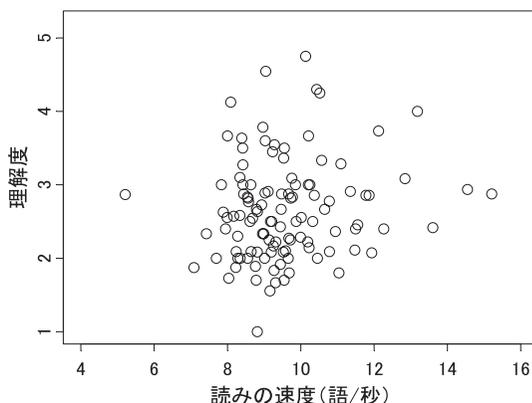


図4 理解度と速度の相関 読み1回目

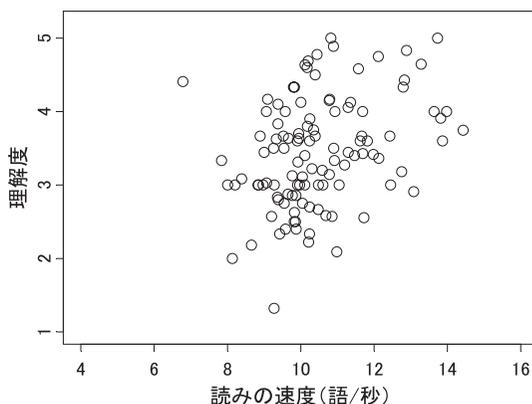


図5 理解度と速度の相関 読み3回目

繰り返しを中心とした読書方法

いたい。

#### 参考文献

- [1] 田中 裕. 2006年. 「「読書百遍義自ら見る」は正しいか」神戸山手短大紀要, 49, 67
- [2] 田中 裕. 2008年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践2」神戸山手短大紀要, 51, 15
- [3] 田中 裕. 2009年. 「質問書方式による考える力をつける教育実践3」神戸山手短大紀要, 52, 63